Debu Miri-yan

Tonosama Miri-yan

Afro Miri-y

Maracas Miri-yan

Sakasa Miri-yan

Kamitabane Miri-yan

しりあがり寿の多重人格アワー

中公文庫

中公文庫

しりあがり寿の多重人格アワー

定価はカバーに表示してあります。

2000年2月10日印刷
2000年2月25日発行

著者　しりあがり寿

発行者　中村　仁

発行所　中央公論新社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-5-104508

©2000 CHUOKORON-SHINSHA,INC. / Kotobuki Shiriagari

本文印刷 大日本印刷　カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 大日本印刷
ISBN4-12-203600-3　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

しりあがり寿の多重人格アワー

しりあがり寿

中央公論新社

目次

プロローグ　6
その一　宗教　9
その二　パンツ　23
その三　恋愛　35
その四　教育　51
その五　防災　65
その六　バカンス　77
その七　日本国憲法　91
その八　殺人　105
その九　隣の女　117

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その十　就職　131
その十一　戦後50年　145
その十二　占い　159
その十三　売春　173
その十四　清潔　185
その十五　文化　199
その十六　21世紀　215
その十七　死　233
あとがき　245

しりあがり寿の多重人格アワー

プロローグ

ビリー・ミリやんという人間は……と書きだして、これほど説明に困る男もいないだろう。それほど彼は、個性というか特徴のない男なのである。

世の中には実にさまざまな性格の人、立場の人、考え方の人がいるが、ミリやんはそーゆー人たちを仮に全部グラフにプロットしたときの0（ゼロ）（原点）にあたるような、いわば中立中の中立ともいえる人間だった。いろんな考え方、いろんな立場をひととおり理解はできるが、どれにも賛同はできない、究極のモラトリアム、永遠の傍観者、それがビリー・ミリやんだった。

だが、そんなミリやんでも、ひとつだけ他の人とはちがう不思議な性向を持っていた。ミリやんは実にしばしば気を失う。そして意

識が戻ったとき、その間のことをまるで覚えてないのである。ただその場で気を失っているわけではない。気を失うまえは確かに東京にいたのが、気づいたら札幌に来ていたり、くやしいのは気を失うまえ、目のまえにあったゴチソウが目が覚めたらキレイにたいらげられてたり……。

そう、それはまるで気を失ってる間、他の人格がミリやんを支配しているかのようだった。

その一

宗教

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その日は梅雨の合間で、久しぶりに晴れあがっていた。ビリー・ミリやんはベランダに出て、雲ひとつない空を見上げた。吸い込まれそうな蒼さだ。

「ホント、空っていうより、『天』って感じだな」

人間界はあいかわらずゴチャゴチャとかまびすしいが、天は静かに悠々とどこまでも広がっている。

「うーん、神様ってホントにいるのかもなあ」

そんな気になるほどの美しい空だった。

と、ふと手にしていた新聞から1枚のチラシが落ちた。

「95年春の新宗教コレクション発表

会場　幕張メッセ」

「こ、これは……」

95年春の新宗教 コレクションのチラシ

ミリやんはその瞬間、気が遠くなった。それが「新宗教コレクション」のとっぴなチラシのせいか、あまりに青い空のせいかはわからない。

「何、宗教、バカバカしい」

誰かが頭の中で嘲笑したような気がした。

「だけど……神様がいなけりゃ……ボクたち人間は……」

それとは別の弱くはかないすがるような想いが広がった。

「でも……神様なんか……」

「ああ神様」

「信じるものは……」

祈るような、唱えるような、つぶやくような、いくつもの声がミリやんの中にわきおこる。やがてまぶしい光の中に、ミリやんの意識は溶けていった。

「おもしろそうなイベントだなあ……救われるかなあ、でも神様ってホントにいるのかなあ……」

チラシを手に疑わしそうに呟くのは迷えるミリやんだった。

「おわしますとも」

柔和な顔に静かな落ちついた笑み、どこか遠くを見ているような目、それは「ヘチマの光教会」で幹部をつとめるミリやんだった。

迷「おお、それで神様はどこにいらっしゃるのですか？」

へ「どこにでもおわします」

迷「ウチにもいらっしゃるのですか!!」

へ「おわします」

迷「となりのウチにも？」

へ「おわします」

迷「どっちがホントの神様なのですか？」

へ「そーゆーもんじゃありません。神様はどこにでも同時におわします」

迷「ああ、私にはよくわからない。そんな、場所とか時間が特定できないものが存在すると言えるでしょうか？」

へ「神様はそーゆーリクツっぽいヤツを愛しませんぞ」

3000年後に人類を救うというヘチマ

迷「おお、それでは神はいったい、どーゆーヤツを愛するのでしょう？」
ヘ「ひたすら神を信じ、教えを守る者を」
迷「どうやったら信じられるのですか？」
ヘ「ただ信じればよろしい」
迷「でも……」
ヘ「キミが神を信じられないのは、修行がたりないせいだ!!　さっそく『ヘチマの光教会』に入信しなさい!!」
「だまされるな!!　それは邪教ぞ！」
と、突然、わって入った者がいた。
それは「聖なる毛ずねの兄弟」の幹部をつとめるミリやんだった。
毛「そやつらの信仰は悪魔の信仰ですぞ。そやつらの神『ヘチマ様』は、我らが神『真実の毛ずね神』の下僕である」
ヘ「な、何をいうか。『真実の毛ずね神』こそ、我らが『ヘチマ様』の子分の子分の子分じゃ」
毛「ええ、『ヘチマ様』こそ毛ずね神の子分の子分の子分の子分だ

「聖なる毛ずねの兄弟」の天国像

あ」

へ「ええい聖戦だ!!」

毛「神よ、異教徒を滅したまえ!!」

迷「ちょっとちょっと待った。じゃあこうしましょう。ヘチマ様と毛ずね神と、この場に先に現金で100万円用意できた方がエライ神様ってことにしたら」

へ「そんなことできるか」

毛「そうだ、毛ずね神はそんなササイなことにかかわらん!!」

迷「そうですか……神様ってのは現金で100万そろえることもできませんか……それでは一体何ができるのですか?」

へ「死んだあと、天国へ行けるぞ」

毛「バカモン、ヘチマなんぞ信じてたら、地獄行きだ。毛ずね神の約束したもう天国は、冷暖房つきだぞ」

迷「私のマンションも冷暖房ついてますが」

へ「ヘチマ様の天国はプールもついてるし、キレイな女の子がいっぱいだぞ」

毛「うちの天国なんかBSのTVつきだし、ツードア冷蔵庫にゃスイカつきだし」
へ「こっちはなんだかワカランけど家族手当てに残業手当てまでついてるぞ」
迷「うーん、ヘチマ様の天国の方が、ちょっぴり上だな」
毛「ええい、このバチ当りめ。おまえなど地獄の業火で焼かれてしまえ」
迷「えー、それは困りますー」
へ「どーせ、おまえのとこの業火はプロパンだろ。こっちは備長炭だ!!」
「ええーい、もうやめんかー!!」
無神ミリやんが、たまりかねたように現われた。
無「もう神様なんて、人間の思想の歴史の中で100年も前にいないことになってんだよ!!　いまさら何を信じろってんだ!!」
へ「あなたはこの世に様々な不思議なことや奇跡が起こっているのをご存知ないのか!!」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com